

大歩危リバーフェスティバル 2025兼吉野川レースラフティング全日本選手権大会  
(ワールドマスターズゲームズ 2027 関西オープン競技プレ大会)安全規則

2026年1月10日施行  
作成者 三好ラフティングプロジェクト

はじめに .....	2
<b>【セーフティーディレクター】 .....</b>	<b>2</b>
(1) セーフティーディレクターとは .....	2
安全管理責任者 .....	2
セーフティーチームの編成 .....	3
資格 .....	3
(2) セーフティーディレクターの役割 .....	3
ディレクターの兼務 .....	3
競技の中止要請 .....	3
セーフティーディレクターの責任 .....	3
セーフティーディレクターによる失格 .....	3
パドリング技術のテスト .....	3
出場停止の勧告 .....	4
コースの変更 .....	4
<b>【安全規則】 .....</b>	<b>4</b>
(1) 基本事項 .....	4
個人装備 .....	4
水温に適した装備 .....	4
チーム装備 .....	4
装備のチェック .....	4
セーフティーディレクターの承認 .....	5
セーフティーチームの権利 .....	5
リスクの認識 .....	5
クラスによる承認 .....	5
セルフレスキュー .....	5
危険性の排除 .....	6
レスキュースタッフの要求 .....	6
規則の変更 .....	6
他チームへの安全対策 .....	6
(2) 大会前の具体的な安全対策 .....	6
大会マップ .....	6
地域への周知 .....	6
コースの下見 .....	6

連絡体制の構築 .....	7
シミュレーションの確認 .....	7
リスクの告知 .....	7
(3) 競技実施中の安全対策 .....	7
情報収集 .....	7
安全管理 .....	7
チームへの周知 .....	8
スタッフの配置 .....	8
連絡手段の保持 .....	8
救助用ボートの配置 .....	8
看護師資格のスタッフ .....	8
AED .....	8
体調管理 .....	8
ダウンリバー時の連絡手段 .....	8
ファーストエイドの携行 .....	8
事故の記録 .....	8

## はじめに

ラフティング（ダッキーなど含む）レースは、自然の河川をフィールドに開催される競技である。その為、自然の川（川岸やその周辺を含む）には、その全てにおいて安全を保証された場所はどこにも存在しないという絶対的な事実がある。

参加する選手は、その事を十分に認識することが重要であり、また大会主催者は、参加する選手に対し「自分の安全は自分で守る（セルフレスキュ）」という基本原則の周知徹底を図る必要がある。

その上で、大会運営においては大会主催者及び参加者は、想定されるリスクを考え十分な安全確保をしてレースに臨むことが大切である。

大会開催においては、大会前の準備を含め、大会に関してのスタッフ・選手の安全部を統括する「セーフティーディレクター（安全管理責任者）」を設ける。

そして大会においてはセーフティーディレクターを中心としたセーフティーチーム（レスキュースタッフ）を編成し、大会に関しての安全部を可能な限り最大限に確保することを最優先する。

## 【セーフティーディレクター】

### （1）セーフティーディレクターとは

#### 安全管理責任者

大会開催において大会前の準備を含め、大会に関するスタッフ・選手の安全面を統括する「安全管理責任者」のこと。

#### セーフティーチームの編成

大会運営においてはセーフティーディレクターを中心としたセーフティーチーム（レスキュースタッフ）を編成し、レースに関する安全面を可能な限り最大限に確保することを最優先にする。

#### 資格

セーフティーディレクター、セーフティーチームにはリバーガイドで尚且、レスキュー3などの急流救助活動講習の受講経験がある者とする。

### （2）セーフティーディレクターの役割

#### ディレクターの兼務

セーフティーディレクターは、レースディレクター（競技管理責任者）の直属、場合によっては兼務であり、競技中の安全を担当する。

#### 競技の中止要請

セーフティーディレクターは、危険な状況または危険な可能性のある状況が発生したと判断した場合、または川の水位があらかじめ設定された安全でない水位に達した場合には、競技を直ちに中止するよう要請することができる。

#### セーフティーディレクターの責任

セーフティーディレクターは、大会組織委員会とともに、リスクアセスメントおよび安全・救助計画の実施に責任を負う。

#### セーフティーディレクターによる失格

セーフティーディレクターは、競技者のセルフレスキュー能力を確認する権利があり、大会

規則に定義されている 最低限の期待事項に従うことができない競技者を失格とすることができる。

#### パドリング技術のテスト

セーフティーディレクターは、競技者のパドリング技術をテストすることができ、競技コースで要求される必要な最低限のパドリング技術を持っていない競技者を失格とすることができる。しかしテスト後、セーフティーディレクターが競技者のスキルに疑問を感じた場合において、競技者がその判断に同意できない場合には再テストを要求することができる。

#### 出場停止の勧告

セーフティーディレクターは、競技者が大会規則に違反すると判断した場合には、その競技者に対し出場停止を勧告することができる。

#### コースの変更

セーフティーディレクターは、レースディレクターとともに、安全上の理由からスタートとフィニッシュの位置を変更する権利を有する。

## 【安全規則】

### （1）基本事項

#### 個人装備

すべての競技者は、自分の個人的な安全装備を用意しなければならない。この装備は、イベント期間中、水の上にいる間は常に使用しなければならない。個人用安全装備は、材料の品質を保証し、業界標準を満たしている公認の製造業者のものでなければならず、製造業者が推薦または承認していない方法で、装備の構造、形状、構成を変更してはならない。最低限必要な個人用安全装備は、以下のもので構成されている。

1. ホワイトウォーター用に設計された浮力ジャケットの形をしたパーソナル・フローティング・デバイス (PFD)。
2. 国内および国際規格に準拠した安全なホワイトウォーター・ヘルメット。
3. 適切な保護用シューズ。裸足での参加は認められない。

#### 水温に適した装備

水温が低い場合、大会主催者はウェットスーツまたはドライスーツ、あるいはその他の坊寒

装備の使用を要求することがある。

### チーム装備

自然の川を利用した競技コースでは、すべての種目において、少なくとも 1 人のチームメンバーが、以下の最低限のチーム安全装備を携行することが義務付けられている。

1. フリップライン
2. スローバッグ
3. リバーナイフ。リバーナイフは片手で操作できるようにする。
4. ホイッスル。水に濡れた場合でも音が出るもの。
5. 外部との連絡が取れる携帯電話

### 装備のチェック

レーススタート前に、セーフティーディレクターまたは、レスキュースタッフの選任された人がチームの安全装備をチェックすることができる。委任された大会スタッフも同様に行うことができる。安全装備の要件を満たしていないチームは、要件が満たされるまでレースを続行することができない。所定のスタート時刻までに安全装備の要件を満たさない場合、レースへの出場資格を剥奪されることがある。

### セーフティーディレクターの承認

セーフティーディレクターは、競技者および／または大会への危険が生じた場合、直ちに競技を中止する権利を有する。セーフティーディレクターの承認を得ずしてレースを開始してはならない。

### セーフティーチームの権利

安全に関する問題は、セーフティーチームが最終決定権を持つ。すべてのチームおよび競技者は、セーフティーチームの指示に従わなければならない。たとえ競技中においても、セーフティーチームが競技者やチームに競技の停止や安全面での支援を求める場合は、セーフティーチームが特定の指示を出し、この指示に従わなければならない。この指示は、その種目の前に行われるキャプテンミーティングで説明される必要がある。大会本部の安全指示を無視、自分や他人の安全を無視するような行為をした競技者やチームは、罰則を受けるまたは、その種目や大会から失格となることがある。

### リスクの認識

大会では、競技者は自分自身のリスクを認識し参加すること。大会スポンサー、大会主催者、大会本部のいずれも、競技中に発生した事故や損害について責任を負わない。大会ス

ツッフおよび競技者を含むすべての参加者は、事故や損害のリスクを最小限にするために、常に安全を意識して行動する義務がある。

### クラスによる承認

いかなる状況においても、クラス5のホワイトウォーターで開催される競技会を承認しない。もし、競技会場やダウンリバーコース内にクラス5や、その他の潜在的に危険な川の特徴がある場合、競技者に情報を知らせ、危険の回避や中止を保証しなければならない。

### セルフレスキー

大会主催者は大会に登録した競技者が、セルフレスキーの能力を持っていることの証明を要求することができる。競技者およびチームは、以下の最低限のセルフレスキーの知識と実演技術を持っていなければならない。

1. フリップしたラフトを人の手を借りずに素早く適正な状態にすること。
2. 介助なしでラフトに乗り込むこと。
3. ホワイトウォーターでの適切な泳ぎ方（ホワイトウォーターフローティングポジション、オフェンシブスイム）。
4. スローバッグの適切な使用（投げ方、受け取り方）。
5. ラフトレースに伴うすべてのリスクの認識と理解。

### 危険性の排除

競技者は、岸辺や水上で安全に行動する責任がある。各競技者は、自分自身の安全だけでなく、チームや他の大会参加者の安全を意識して、安全に行動することが求められる。競技者は、自分の個人的な装備、ラフト内の姿勢、ラフト内のセットアップを安全に維持することが求められる。例えば、鋭利なエッジ、緩んだロープ、ループ、開いたカラビナなど、周囲の潜在的な危険性を排除することが求められる。

### レスキュースタッフの要求

レスキュースタッフは、安全要件を満たすために、競技者の個人装備、ラフト内の姿勢、セットアップの調整を要求する権利を有する。レスキュースタッフの指示や要求に従わなかつた場合、罰則や競技・大会から失格になることがある。

### 規則の変更

レースディレクターおよびセーフティーディレクターは、安全性向上のために必要と考えられる場合、上記の規則を変更する権利を有する。そのような変更は事前に発表されなければならない。

## 他チームへの安全対策

競技を終えたチームは、次のチームが降下を終えるまで、安全対策のためにフィニッシュラインのすぐ下に留まらなければならない。この安全対策は、セーフティーディレクターがキャプテンミーティングで全チームにこの安全対策を必要としないことを明確かつ公式に伝えた場合を除き、すべてのレースに適用されるものとする。

## （2）大会前の具体的な安全対策

### 大会マップ

コース全域における道路から各激流・川岸へアクセスできるポイントを記した「大会コースマップ」を作成する。

1. 各アクセスポイントには、共通の番号・名称を明記する（認識の簡素化）。
2. 「大会コースマップ」には、非常時連絡先（大会本部・スタッフ・消防・警察など）も記載しておく。

### 地域への周知

大会前にレースが開催される地元地域の消防署、警察署、河川管理者、地域住民への連絡を徹底する。大会コースマップ・日程を渡しておく。

### コースの下見

大会前日（可能であれば当日の早朝など）にはセーフティーディレクター及びレスキュースタッフは、コースの下見を実際にボートで降下して実施する。

1. 川の流れ、障害物など、何か変化はないか？異常はないか？入念にチェックする。
2. 何か気付いた点があれば「セーフティーディレクター（安全管理責任者）」に報告し、対策を講ずる。危険箇所がコース内にある場合は排除または共有をする。

### 連絡体制の構築

大会本部、セーフティーディレクター、各レスキュースタッフなどの連絡網（携帯番号など）を確実に構築しておく。緊急事態にすぐに連絡し対応できるようにする。

### シミュレーションの確認

万が一、レース中に事故が発生した場合のシミュレーション（連絡のとり方、移動手段など）を大会本部やレスキュースタッフなどを含めた全ての大会スタッフで入念に確認する。

## リスクの告知

レースが行われる河川において、増水時と減水時に予想されるリスクを把握し、その情報共有と告知を徹底する。

## （3）競技実施中の安全対策

### 情報収集

レース当日の情報収集として以下の事項を行う。

1. 気象情報（特に降雨・雷・強風など）を把握しておく。
2. レース当日の水位、上流にダムがある場合は放水情報を把握しておく。

### 安全管理

セーフティーディレクターは、以下の事項を中心に大会の安全管理を行う。

事前に入手した情報を基に、転覆・落水のリスクのある箇所を把握すること。

1. 安全面に懸念がある場合に、コースの変更・中止を競技責任者に申し入れをすること。
2. 転覆・落水のリスクが考えられる激流・場所には、必ずレスキュースタッフを配置すること。
3. 大会当日に全選手向けの安全説明（セーフティーブリーフィング）を確実に行うこと。
4. また安全説明（セーフティーブリーフィング）の際には、選手からの意見・要望も確認し、必要であればあくまでも安全を最優先しながら、コース変更など柔軟に対応する。
5. 選手が使用する道具の安全チェックを、自らの指示・判断のもと、安全知識のあるスタッフによって、行わせること。なお、特に以下の点を留意する。
6. レースに使用する機材（ボート・ヘルメット・PFD・パドル・スローバッグ・フリップライン・服装・シューズ・ホイッスル・リバーナイフなど）は適切なものを保持しているかをチェックする。特に選手が使用するボートには選手自身を拘束する可能性があるもの（ロープ・ストラップなど）がないか入念にチェックする。

### チームへの周知

参加選手に対し、もし事前にコース上に危険箇所を発見した場合、レース開始前に大会主催者及びセーフティーディレクターに知らせる事を周知徹底する。必要があれば、キャプテンミーティングなどの開催を求め、参加選手に情報共有すること。

### スタッフの配置

配置したレスキュースタッフ（誰・場所）は、大会本部で必ず把握しておく。

## 連絡手段の保持

レスキュースタッフは、必ず連絡手段（携帯・無線など）を保持しておく。

## 救助用ボートの配置

より安全性を高める為に、最後の選手がスタートした直後からそれを追走しながらコース全体の安全を確認していく救助用ボート（セーフティーラフト・カヤック・ダッキーなど）を配置しておく。

## 看護師資格のスタッフ

大会においては可能な限り看護師資格を有するスタッフを配置する。

## AED

大会においては可能な限り AED（自動体外式除細動器）を用意（レンタルなど）しておく。

## 体調管理

レース当日の体調管理は正しく行うこと。レース直前、及びレース中のアルコール摂取は厳禁とし、またレース前日の過度なアルコールの摂取も厳禁とする。

## ダウンリバー時の連絡手段

ダウンリバー競技において主催者の目が届かない中でも、緊急時に主催者と連絡がつくよう携帯電話の携行を義務とする。

## ファーストエイドの携行

参加選手が自らファーストエイドキットを携行することを推奨する。

## 事故の記録

大会において、もし事故が発生した場合には、以下の情報を可能な限り詳細に把握しその記録を保存すること。

1. 事故発生現場の正しい位置・箇所・状況（水位・天候など）
2. 事故発生時刻
3. 実際に行われたレスキュー活動の詳細（経過時刻含め）
4. 事故発生の要因・原因
5. 事故、レスキュー活動に関わった人物
6. 事故、レスキュー現場を目撃した人物